

右筆は龜井六郎。

七斗分二千三百三十石餘。其時の一升は六尺六面と云。利足を本へ直し、十二月日數今年迄五百年餘算用候へば、際限無之候。但今の斗升にいたし、代銀も今の銀にして、七斗を五十石計にして、十年の積算用候へば、一貫三百目計に當候。其積を以て五百年にいたし候へば、六百貫目餘にも成可申やと江戸より告來る。

一、藤莘野、李東郭唱和の詩

正徳辛卯之初冬
清見寺題謝芝岸老師

趙 平 泉

清曉山門得暫過、樓頭拂席白雲多。峯連富嶽千秋雪、日湧滄溟萬里波。花樹地喧常爛熳、韻僧年老尙吟哦。忽々却別諸天去。王事關心四牡歌。

東都歸路過清見寺。奉次通信正使趙公留題韻

伊 莘 野

晚來駐馬此經過、清見寺中好趣多。山古如尋台嶠、路門高似對浙江波。千般佳景眞圖畫、一首新詩巧詠哦。遠客偶遊形勝地。暫時休唱渭城歌。

縣河客夜走次莘野詞伯清見寺韻 李 東 郭

聞子才從古寺過。日邦佳景此中多。宵燈影雜諸天月。曉鼓聲翻大海波。勝地名傳東土久。使星詩續昔人哦。烟霞咫尺清遊阻。回首叢林動客歌。

東郭朗吟莘野詩再三書云。佳作佳作少焉次篇成。

一、北野の神怪二事

豊前守岡田善政話に、太閤秀吉公の時齋藤右近・齋藤主馬とて従父兄弟の者奉仕す。二人共明智光秀が家老齋藤内藏介一類也。光秀滅後右近、主馬共に閣下へ奉仕す。或時右近潛に訴るは、主馬逆心ありて太閤をねらひ奉る由を云。

依之主馬を召て詰問の處、聊左様の惡意無之、是は右近が讒言の由を告す。於是兩人於北野社頭鐵火を探らしめらる。其檢使某が父將監奉之。某時に六歳なり、父に隨ひ其場に赴く故其様子を見たり。初めに主馬手に牛王を敷き、其上に鐵火を置いて階を上り、神前に鐵火を据置て退ぬ。次に右近も如此にして階を昇らんとする所に、牛王燃出て顔へかゝり鐵火落ぬ。便ち兩人の手に鞆を懸て監官と相對し、七日を過て見之に、右近手中爛れ壞る。主馬手は無恙。依之右近は刎首の刑に處せられ、主馬は如舊奉仕す。此委細は

年經て聞畢。其時は幼少故何の辨もなく、兩人鐵火を手に

据て神前へ赴く所を、後先になり神前へ至り内陣を窺見るに、年五十有餘の衣冠正しく笏を持、翠簾の内より御眼見出し坐し給ふ。餘人の目には不見や有けん、敬拜する躰も無之。某は何の思慮もなく、天神也と見居たる迄也。年經成長の後、此事を感心し信仰無他。或時參詣の序、北野の神影を奉拜ものは、某ならでは有間敷と、社司へ話しけると也。長門國に三寸天神の社あり。丞相自畫の影と云。祭禮には古來の舊例にて、安藝國司より三寸を獻す。便ち神前に供す。即時に畫像の御面赤く成りぬ。參詣の諸人毎度奉見と也。長門浪人前田三郎兵衛と云者本藩へ來り、後剃髮して井上友雪と改稱す。此人度々奉見と云。

一、八條宮家管廟異聞

八條宮一品式部卿智仁親王は、陽光太子の御子にして後陽成帝の皇弟也。關白豐臣秀吉公の猶子として新家を建らる。是八條家の祖也。御領地城州桂の里下邸の内に、古來天神の社あり。是は丞相左遷の時先づ都下を退去、桂里の下邸に移られ、此所に暫く停留あつて筑紫へ下向せらる。此時守

邸の舊臣の内、特に忠愛深く戀々の情に不堪善く奉仕す。

丞相其志を感喜し、自ら畫像を圖して贈之、且言く。某再歸京の事難し。某を戀思はゞ是を看よとて賜りぬ。彼子孫相傳て是を社主として一祠を造立し、代々崇奉すと云。然に歲序推移り、其來歴を無知者。智仁親王の子智忠親王の代、萬治年中其祠を破却し園觀の地とす。無幾智忠病腦、寛文二年壬寅七月七日薨す。智忠親王夫人菅氏加賀中納言利常女。寛永十八年九月薨。無嗣。後水尾帝皇子爲養子立ち、八條宮二品式部卿穩仁親王と號す。

寛文五年乙巳十月三日早世す。無嗣。後西院皇子立つ。八條宮無品中務卿長仁親王と號す。延寶三年乙卯六月二十五日蚤世なり。無嗣。同帝皇子立つ。八條宮二品彈正尹尙仁親王と號す。元祿二年己巳八月六日早世なり。無嗣。僅に二十七年の内にして四親王相尋で逝去す。是偏に天神の祟無疑として、仙洞の勅定にて桂里天神の社、如舊再興有之。且八條の家號を削停し、而して仙洞の皇子作宮をして彼遺跡を續がしめ、新に號常磐井宮母は菅氏。五條爲庸の女也。然に此宮も無幾病苦し、典藥頭も醫療無驗と云。公卿僉議の日仙洞勅して云。智忠誤て破却天神社す、故に新に設